

8

HIV感染症の医療体制の整備に関する研究（中国四国ブロック）

研究分担者 藤井 輝久

広島大学病院 輸血部長・エイズ医療対策室長

研究要旨

本研究ではHIV陽性者の非専門施設への受け入れを構築するための資材の開発や研修の開催を行っている。新型コロナウイルスも感染症5類となり、多くの研修会がコロナ禍前の参集で行う形式に戻った。さらに、血友病薬害被害者対象検査入院や検査外来（検診事業）にも、新規患者の応募があった。昨年度よりあらたな試みとして始まった、血友病薬害被害者対象の「なんでも相談 とも」の成果と思われる。研修内容については、時代と共に参加者の意識やそのニーズも変化しているが、一方で病院の中間管理職以上の様々な職種で、古い知識や疾患に対する偏見が依然として存在し、若手育成の障害になっていることも分かってきた。今後は研修のみならず、各職種において若手の育成や、興味のある若手がHIV診療領域に今後も留まるようにより適切な対応も同時に必要と考える。

A. 研究目的

本研究の目的は、HIV感染症患者に対する医療・福祉サービスが他疾患と同等に行われるよう、中国・四国地方の医療及び福祉体制の整備を行うことである。具体的には、①エイズ拠点病院・中核拠点病院（以下、拠点病院）のエイズ診療の質の向上とその維持を確保、②非専門施設（病院、医院）や介護・福祉施設などにおける疾患に対する偏見からもたらす差別的対応の解消、である。具体的な方策として、拠点病院所属構成員に対しては、職種別研修会の開催を行うこと、教育資材の配布を行って、ケア提供者の人材育成と資質の向上を図ることである。また、非専門施設や介護・福祉施設構成員に対しては、より平易な内容による教育や働き掛けである。また以前から薬害被害者から要望の強い「血友病」の包括的診療にも重点をおき、当該患者の高齢化および余病に対応する研究も行う。具体的な方策はHIV感染症だけでなく、血友病にも対応できる医療機関・施設を増やし、スムーズな「病診連携」を実現するための研修内容や教育資材の改良を行うことも目的の一つである。

B. 研究方法

研修会に関しては、その参加者数と参加者アンケートなどを集計し、その内容や評価を集計した。

その際に、個人情報と思われる項目を除いた。またこの研究においては、自施設の倫理委員会の承認を得ており、また学会や報告書等での発表時には匿名化あるいは個人情報に配慮した形で行った。これらをもって倫理面の配慮とした。教育資材は、日常診療における患者、特に薬害被害者の要望あるいはブロック内の医療・介護従事者のニーズ等を勘案し作成した。また新たな情報が得られた場合には、資材に反映させるために、アップデートを行った。

C. 研究結果

1. ブロックでの教育研修

1-1. 医師を対象とした研修会

開催日：2023年8月21～2日（1回目）。2023年9月25～26日（2回目）。場所：広島大学病院（広島市）。研修参加医師数：計6人。

内容は【表1】の通りで最も評価が高かったのは、例年通り「PWH/Aの体験談」であった。また研修終了後の感想では、全員が「後輩の医師にも勧めたい」と答えた。なお、各職種の講義資料は、「広島大学病院エイズ診療医のための研修会・資料集」としてまとめて、全国の拠点病院へ配布した。【図1】。

表1 医師を対象とした研修会プログラム

午前	1日目(月)	午前	2日目(火)
		9:00	演習: HIV検査の勧め方・告知の仕方 公認心理師: 喜花伸子、杉本悠貴恵 医師: 山崎尚也
		11:30	外来見学 担当(医師): 齊藤誠司、藤井輝久
		12:30	
午後		午後	
12:45	受付開始		
13:15	集合・オリエンテーション 担当(医師): 山崎尚也		
13:30	講義: HIV感染症(診療の現状と最近の話題) 医師: 藤井輝久	13:30	演習: 症例検討 担当(医師): 山崎尚也、藤井輝久
14:45	講義: 薬剤師の役割 薬剤師: 石井聡一郎	15:00	講義: 血友病の診療(薬害の歴史を踏まえて) 医師: 藤井輝久
15:45	講義: 看護師の役割 看護師: 後藤志保、坂本涼子	15:30	演習: ポストテスト 担当(医師): 山崎尚也、藤井輝久
16:15	講義: ワーカーの役割 MSW: 村上英子	16:15	外来ケースカンファレンス
17:00	講義: PWH/Aの体験談 担当: 当事者	17:00	まとめ・終了
17:30	1日目のまとめ		

1-2. 歯科医師を対象とした研修会

1) 拠点病院勤務医師及び歯科医師会向け研修会

開催日: 2023年10月22日。場所: 岡山国際交流センター(岡山市)。開催形態は参集とオンラインのハイブリッド形式であった。例年通り、今年も午後から行われる「中国・四国地方HIV陽性者の歯科診療体制構築のための研究協議」に併せる形で当日午前中に行った。現地研修参加者は歯科医師・歯科衛生士併せて計26人であり、3人のオンラインでの参加者を含め総計34人であった。はじめに兵庫医科大学血液内科の日笠聡医師より「HIV感染症の現状」の講演があった。次に大阪HIV薬害訴訟原告団の橋本則久氏より「歯科への期待のメッセージ」が述べられた。午後からの会議の内容は、各県の「HIV歯科診療体制」、特に歯科医師会が主導する歯科診療ネットワーク構築についての現状報告及び今後に構築に向けて議論が交わされた。話題提供として、兵庫県と福岡県の歯科医師会の担当者から各県の歯科診療ネットワーク構築の状況が報告された。

2) 一般開業歯科医向け研修会

開催日: 2023年11月19日。場所: グリーンヒルホテル尾道(尾道市)。研修参加者数16人。開催形態は参集。講演者は、兵庫医科大学呼吸器・血液内科の琉球大学第一内科の仲村秀太医師、本院輸血部の山崎尚也医師、国立病院機構福山医療センターの齋藤誠司医師の3人であった。



図1 エイズ診療医のための研修会プログラム資料集

1-3. 看護師を対象とした研修会

1) 初心者向け(2回)

開催日: 初回2023年6月22日～6月23日、2回目7月27～28日。場所: 広島大学病院(広島市)(参集形式)。参加人数は2回の合計で30人。

参加者の勤務施設、症例経験数などは【図2】の通りであった。県別参加者は昨年までと大きく異なり、広島県外の参加者が過半数であった。役職別では、一般スタッフが多かった。またHIV感染/エイズ患者の看護未経験者は63%と、昨年に比べ増加した。経験者においても、ほぼ1人か2人程度で半分であった。受講動機は、「基礎知識の習得(自己

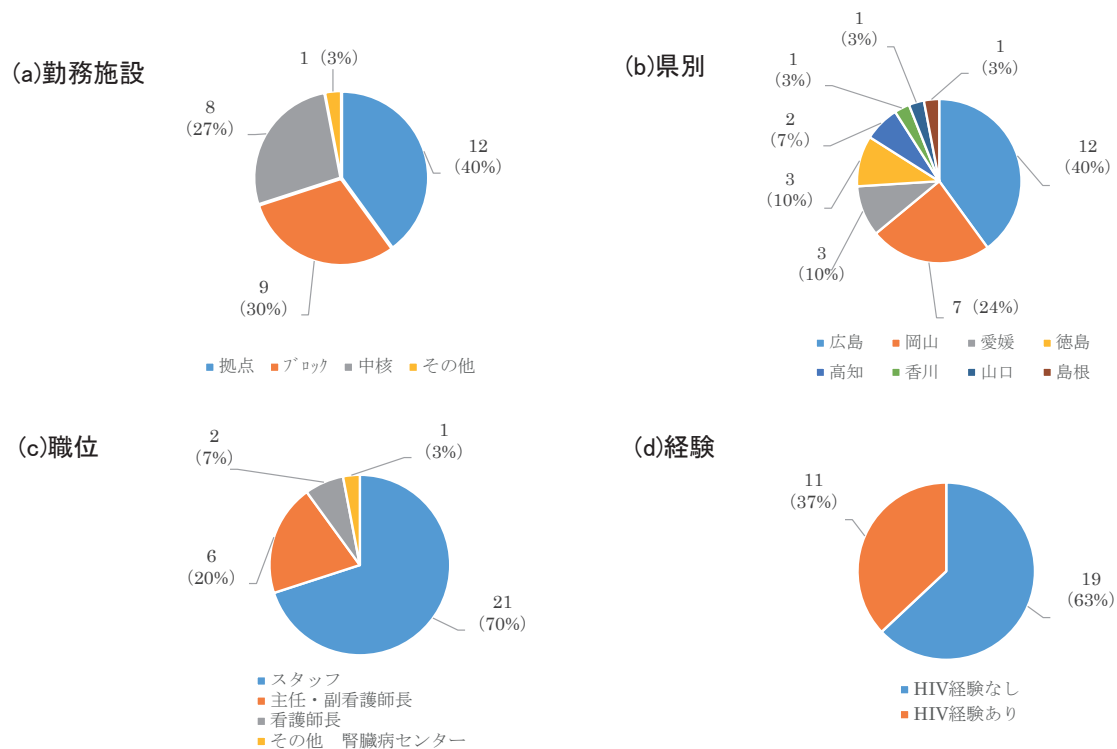


図2 看護師のためのエイズ診療従事者研修会参加者の背景

研鑽)」が参加者全員で一番多く、ついで「今後患者が来た際に対応できるようになる」であった。

研修後、参加者全員に内容についてアンケート調査を実施した【図3】。内容について、理解度と満足度を尋ねたところ、理解度が最も高かったのは、HIV検査告知の「ロールプレイ」であり、満足度が最も高かったのは、臨床心理士による講義「HIV陽性者の心理的支援」、NPO法人による講義「性の多様性」、看護師による講義「HIV陽性者の看護 各論」、演習「ロールプレイ」がそれぞれ90%ともっとも高かった。

2) 事例検討会（経験者向け）

開催日：2023年10月28日（オンライン形式）。参加者12人。当日午前に行われた「中国・四国ブロックエイズ治療ブロック/中核拠点病院等看護担当者会議」に併せる形で、会議終了後の午後に行った。

昨年までと違い、基調講演は行わず、中核拠点病院が困難事例を持ち寄って、3つのグループに分かれてそれぞれの事例検討を行った。検討に際し以下の方法により事例のプライバシー保護を行った。①Zoomのブレイクアウトルームにて検討を行う②事例の概要はオンライン上に掲示せず、事前に資料として参加者へ郵送。検討後に返送。

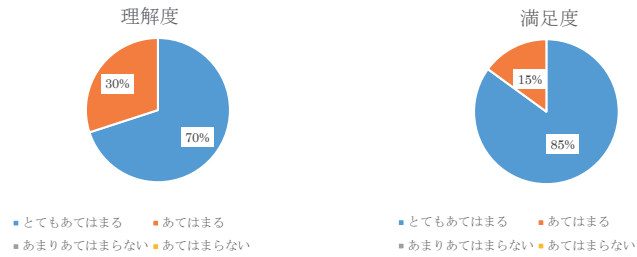
1-4. 中国四国ブロック内の拠点病院に勤務またはその院外薬局の薬剤師を対象とした研修会（薬剤師のための抗HIV薬服薬指導研修会）

開催日：2023年7月29～30日。場所：広島市文化交流会館（広島市）。参加者はスタッフを含め58人であり、4年振りの参集開催。また広島県臨床心理士会が行う「HIV/AIDS専門カウンセラー研修会」との共催かつ1泊2日で行うことも4年振りであった。

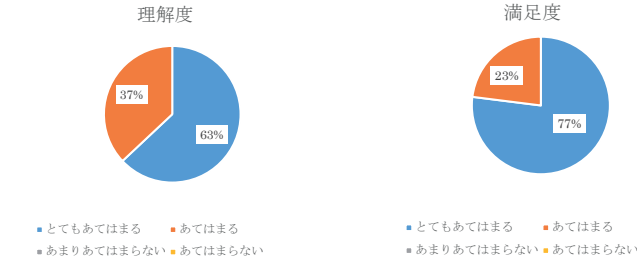
講義では、「HIV感染症 近年の話題も含めて」と題して国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センターの安藤尚克医師によるHIV感染症の基礎から最新の治療等の講演があった。また、荻窪病院小島賢一臨床心理士より、「最近の東京の話題と面接室での話題」と題し、HIV感染症患者等との面談で近年問題となっている事項等についての講演があった。症例検討では、国立病院機構大阪医療センター矢倉裕輝薬剤師より、症例提示がなされ、HIV感染症診療の初任者から経験のある薬剤師までが学びを得られるディスカッションとなった。

演習パートでは、ロールプレイによる服薬指導の体験的学習を行った。専門カウンセラーおよびソーシャルワーカーも含めた6つのグループに分かれ、参加者に簡単な場面を提供し、各グループで詳細な

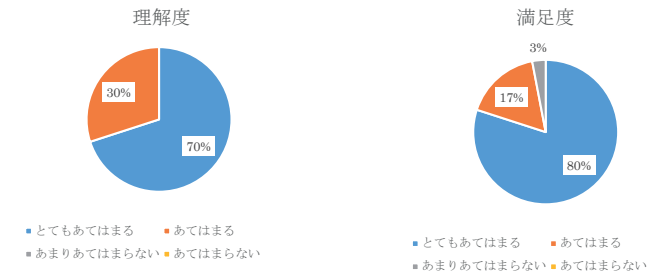
医師「HIV/AIDSの基礎知識」



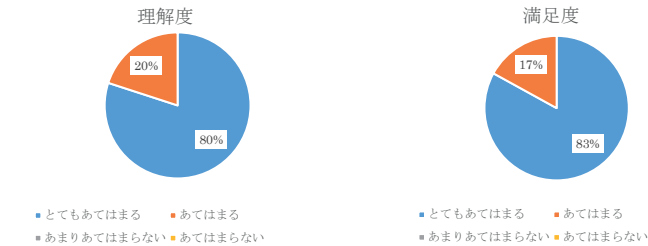
薬剤師「抗HIV薬の服薬援助について」



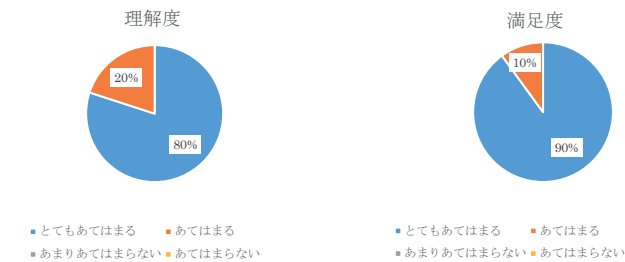
看護師「HIV陽性者の看護 総論」



歯科衛生士「HIV疾患と歯科」



公認心理師「HIV陽性者の心理的支援」



医療ソーシャルワーカー「社会資源の活用」

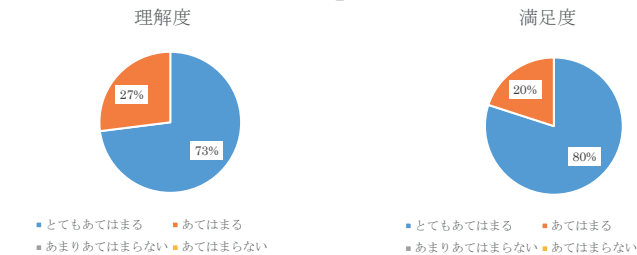
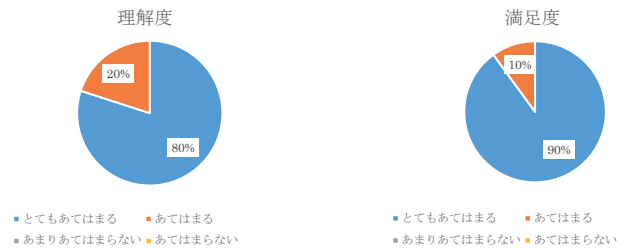
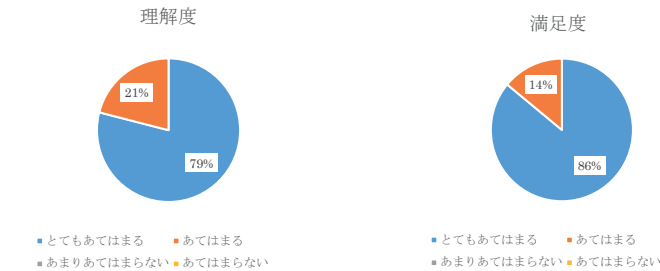


図3-1 看護師のためのエイズ診療従事者研修会アンケート結果（“とてもあてはまる”が最高）

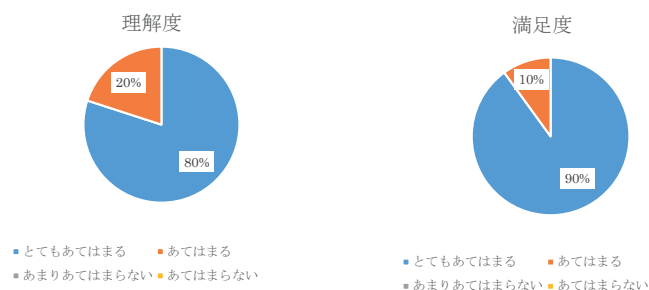
NPO 法人アカー「性の多様性」



HIV 薬害被害訴訟原告「薬害エイズの歴史・血友病と共に生きる」



看護師「HIV 陽性者の看護 各論」



演習「ロールプレイ」

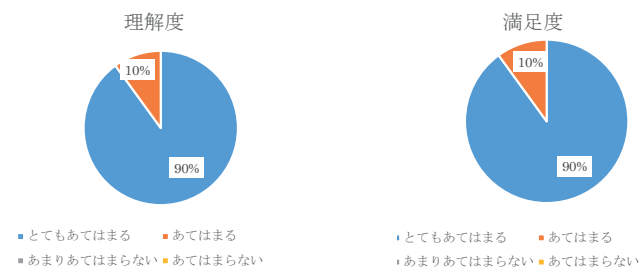


図3-2 看護師のためのエイズ診療従事者研修会アンケート結果（「とてもあてはまる」が最高）

状況を設定、患者役と医療従事者役を決定しロールプレイを実施した。ロールプレイは録画し、ロールプレイ後に参加者全員で録画を見直し、良かったところ、改善するとより良くなることをディスカッションして全体で共有した【図4】。

1-5. エイズ拠点病院に勤務するメディカルソーシャルワーカー（MSW）を対象とした研修会

開催日：2023年8月27日。開催場所：岡山コンベンションセンター（岡山市）。中国四国ブロックエイズ拠点病院21施設、26人が参加した。

ブロック内の中核・拠点病院のMSWにHIV陽性

者に対するソーシャルワークの実践として、参加者の日頃の支援内容を発表してグループワークにて共有した。他に、医師による「HIV感染症の基礎知識・最新情報」、大阪原告団理事による「薬害エイズの教訓から」といった講義、さらに国立国際医療研究センター病院エイズ治療・研究開発センター（以下、ACC）ケア支援室の木村聡太心理療法士による「HIV陽性者の治療過程およびライフサイクルにおける患者心理」の計3つの講義を提供した。

研修終了時のアンケートでは、「心理的支援においては、患者と共に悩むことも支援だと学んだ」、「心理士の介入の重要性を理解できたので、自院で



図4 薬剤師のための抗HIV薬服薬指導研修会の様子

も活用できるような支援体制を構築したい」、「薬害被害当事者から、直接患者さんが置かれてきた環境を具体的に知ることができた」、「MSWは制度利用等で個人情報を取り扱うので患者が不利益にならないよう、細心の注意を払う必要性を再認識した」、「自院にはHIVチームがないので、まずはこの会議・研修会の内容を医師や部署内で周知したい」との感想がみられた。

1-6. 出前研修

本院入院患者の終末期医療への対応において、身寄りのない外国人患者の自宅での看取り目的で介入した地域クリニックおよび訪問看護ステーションに向けて、介入後にオンラインで実施した。また、この内容は、広島県エイズ治療中核拠点病院等連絡協議会及び医療従事者研修会で症例報告として発表、広く周知した。

1-7. その他

「その他」とは、実施主体（主催）が本院ではないが、分担研究者やその研究協力者が研修の立案に大きく関与し、かつスタッフとして協力した研修会である。

1) 心理職対象HIVカウンセリング研修会（初級者向け）

開催日：2023年7月29～30日。場所：広島市文化交流会館（広島市）。前述の薬剤師向け研究会と共催。コロナ禍では、オンライン形式で開催をしていたが、今年度より集合形式を再開した。中国四国ブロック内のHIV治療施設に勤務する心理職及び福祉職を対象に開催し16名の参加があった。HIV感染症の医学的知識と心理社会的支援に関する講義に加え、実際の支援場面を想定したロールプレイとグ

ループディスカッションを行った、事後アンケートでは、「職種の垣根を越えて意見交換ができてよかった」などの感想があった。

2) HIV/AIDS専門カウンセラー研修会

開催日：2024年2月23日。場所：広島市総合福祉センター（広島市）。本研修会は、HIVカウンセリングの専門性を高めることを目的に、中国四国ブロック内のHIV診療施設勤務の心理職及びHIV派遣カウンセラーを対象に事例検討会を行う。

3) HIV抗体検査相談従事者のためのカウンセリング研修会

開催日：2023年8月4日。場所：広島市総合福祉センター（広島市）。中国四国ブロック内のHIV抗体検査相談に従事する医師、保健師および派遣カウンセラー等を対象に集合形式で開催し、31人の参加があった。HIV検査に関する講義と当事者の話の後、架空事例を用いたロールプレイを行った。研修参加前は、検査相談や告知時の対応への不安が高かったが、研修参加後はどの場面においても不安が軽減しており、「受検者の気持ちを疑似体験できたことで学びが深まった」などの感想もあった。

4) 全職種対象の研修会（包括カウンセリングセミナー：広島県臨床心理士会主催）

開催日：2024年1月6～7日。場所：KDDI維新ホール（山口市）。開催形態：参集。中国四国ブロック内の中核拠点病院及び拠点病院のうち、HIV診療を行っている医療機関のスタッフを対象とした研修会である。コロナ禍によりオンライン形式で1日のみの開催を継続してきたが、今年度は4年ぶりに1泊2日でのコロナ前の形式に戻すことができた。参加者31人。HIV検査に関する講義と当事者の話の後、架空事例を用いたロールプレイを行った。研修参加前は、検査相談や告知時の対応への不安が高



図5 発行・配布している小冊子一覧

かったが、研修参加後はどの場面においても不安が軽減しており、「受検者の気持ちを疑似体験できたことで学びが深まった」などの感想もあった。

[2] エイズ関連の教育資料

2-1. 小冊子・パンフレット等

「現在、本研究費で作成・発刊している小冊子・パンフレットは【図5】の通りである。今年度は、「初めてでもできるHIV検査の勧め方・告知の仕方」をVer.8に改定した。

[3] その他医療・福祉体制の構築に関する取り組み

3-1. 中四国エイズセンターホームページ (<http://www.aids-chushi.or.jp>) による情報発信 【図6】

本院主催の会議や研修会の様子を掲載した。また前述の小冊子の案内や、中国四国地方で行われるエイズ・HIVに関する研修会・イベントの案内、血友病薬害被害者対象検診外来のお知らせ等を掲載している。（2023年1年間の閲覧数123,906回）。

3-2. 非職業的曝露後予防内服（nPEP）

2019年4月1日より開始している。メール又は電

話で処方希望者より連絡が入るが、今年度は20人連絡があった。うち12人は外国人かつ11人が日本非居住者であった。そのため、連絡が来た時の滞在場所の多くは東京又は近畿圏であった。東京滞在者は国立国際医療研究センター・エイズ治療研究センターへ、近畿滞在者は大阪のいだてんクリニックまたは谷口医院を紹介した。5人の受診があり、うち全員に抗HIV薬の処方を行った。

3-3. 薬害被害者検診外来

2018年度より「血友病薬害被害者対象検査入院」（検査入院）、2021年度より「血友病薬害被害者検診外来」（検診外来）を行っているが、共にその費用は保険請求せず、全て研究費で工面することとしている。2023年度は検査入院3人、検診外来2人であり、1人を除く4人は初めての受検であった。内容は、血友病に関連する関節や身体機能に関する項目や腫瘍マーカーなどの血液検査で、それ以外の画像検査の項目については受検者の希望とした。今年は、山口県の患者3人が新規に受検した。後述する「なんでも相談 とも」から受検につながった。

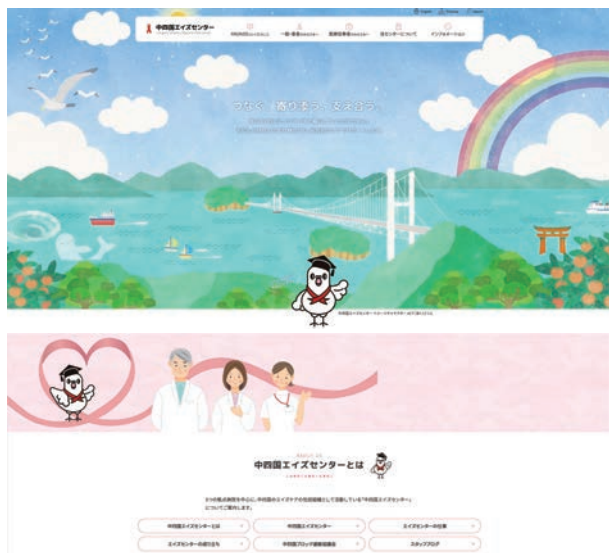


図6 中四国エイズセンターのホームページ

3-4. 血友病薬害被害者支援「なんでも相談 とも」

中国四国地方および近隣県在住の血友病薬害被害者を対象に、MSW、看護師、心理師が相談者となり、生活上の問題や不安を解決に導く目的で昨年度より始まった。具体的な相談法は、電話、オンライン面談（オンラインソフトやスマートフォンを利用）、対象者宅への訪問などである。周知方法は、中四国エイズセンターホームページへの掲載【図7】、拠点病院HIV/血友病診療医宛てに概要の送付、薬害被害者支援団体から登録者への概要送付などである。昨年度は訪問支援を行った患者が検診事業につながった。

3-5. 多言語に対応したHIV関連資料の取り組み

本院ならびに中国四国ブロック内の拠点病院の通院患者に、外国籍の患者が増加しているため、ホームページと受診時の案内の多言語資料作成を行った。

さらにMSWが対応する福祉制度の説明時に使用できる多言語制度説明資料を作成した。資料は、対応言語は現在の日本語と英語に加え、ポルトガル語・ベトナム語・フィリピン語・インドネシア語の計6言語。今後、ホームページから必要項目をダウンロードできるように設計し、中国四国ブロック内のMSWに限らず、全国のMSWへの周知や利用を目指す。

D. 考察

考察は以下の通り研修会別に述べる。

なんでも相談 とも

◆相談事業について
生活やご家族、環境などに変化が出てくことで、新たな悩みが来たり、不安が大きくなっていませんか？
解決するために何から始めたらいいのかわからない、その糸口を探すために、まずは気になっているお気持ちを聞かせてください。
ご相談方法は、お電話、オンライン対面相談、スタッフによる訪問からお選びいただけます。

近しい方や、ともに話そうような気持ちで、気軽に相談ください。
わたし達は一人ひとりに寄りそい、ともに解決に向けてお手伝いします。

相談手順

1. まずは、当方に『なんでも相談 とも』を希望しますと、お電話ください。
電話：082-257-5351(直通)
月～金曜日、9時～16時(会議等で不在の場合もあります)
土日祝日をご希望の際は、事前にご相談ください。
2. ご相談のスタイルを教えてください。
< 電話 or オンライン対面 or 訪問 >
◇アップル社製の端末(iPad・Mac)をお持ちの方は、facetimeでのオンライン対面相談も承ります。準備が整うまで、Zoomでの対応になりますが、ご希望の際は伝えてください。但し、オンライン対面相談は、インターネット環境が整備されている方に限定させていただきます。
◇訪問をご希望の際は、面談日時や場所のご相談を承ります。
3. 内容に応じて、適した職種(看護師・心理士・ソーシャルワーカー)がお話を伺い、解決方法を一緒に考えます。
ご相談内容により、各種関係機関をご紹介しますこともあります。
4. 「なんでも相談 とも」スタッフによる、相談の継続をご希望の際は、次回の相談日時を決定します。
定期的な電話・オンライン対面相談も可能です。
また、本院で実施しております【検診外来や検査入院^{※1}】のご利用を悩んでおられる際にも、お気軽にご相談ください。
^{※1} 血友病薬害被害者対象の検診外来・検査入院のご案内

◆対象者

- 中国四国地方近隣県にお住まいの、血友病薬害被害者さんとそのご家族等。
- 通院医療機関は問いません。

お約束ごと

- ご相談者の個人情報は適切に管理します。
- ご相談内容によっては、通院先スタッフと情報を共有し、適切な支援につなげる場合があります。その際の情報共有については、ご相談者の意向を尊重します。
- 電話・オンライン対面相談は60分以内となります。
- ご相談者からのお電話、オンライン対面相談時の電話代、通信料に関しては、ご相談者のご負担になります。
- 訪問時のスタッフの交通費や相談会場利用費、ご相談者の自宅から相談場所までの交通費等は、ご相談者のご負担にはなりません。
- 患者支援団体との協働で、相談対応を行う場合もあります。

お問合せ先

広島大学病院エイズ医療対策室
広島県広島市南区霞1-2-3
電話：082-257-5351(直通)

図7 何でも相談 とも

医師向け研修会：

近年の参加者は、研修医または卒後10年以内で、これからHIV診療を担う世代となっている。そのため、当初講義内容は、新薬の紹介や最新の知見などを盛り込んでいたが、初心者向けの内容に変更せざるを得ない。各ブロックにおいても若手医師の育成が課題となっているが、その理由を筆者なりに考察すると、①外来での治療が中心であり、病棟中心の医学生・研修医教育が現状では、患者を担当する機会がない ②疾患背景や医療体制が特殊で、自分にその役割が担えるか不安 などではないだろうか。以前のような、医療者への感染に対する恐怖、セクシャリティに対する嫌悪感は、若い医療者にはほとんどなくなっているものの、自分の上司や他職種（看護師など）が持つ古い知識や偏見が、彼らがHIV診療を始める上での阻害因子となっている。

本来、この研修会は、若手のHIV診療医師を育成することを目的に始めたため、休日に1日で行っていた。しかし、この開催では、研修参加者がHIV感染症患者を診る機会がなかった。そのため、現在の2日間の平日開催とし、患者の診療見学もプログラムに取り入れた。知識の習得やHIVに興味を持つことには有効であったが、いざ現場に戻ると

上司や同僚達の考え方が障害となり、また習得した知識や技術を発揮する機会（HIV感染症患者の診療）も少ないため、そのうちHIV診療への興味を失ってしまう。

これらの問題を解決するためには、歯科医師向け研修会のように、病院の科長・部長レベルに対する教育や、開業医・医師会などに対する働き掛けも必須であろう。しかし、現在の平日2日間のプログラムでは、そういった立場の医師の参加は逆に困難である。全く別のプログラムを企画する時期に来ているのかもしれない。

歯科医師向け研修会：

中国・四国地方HIV陽性者の歯科診療体制構築のための研究会議においては、昨年中国・四国全県から歯科医師会関係者の出席があったが、今年は再び香川県からの出席がなかった。中四国では香川県のみHIV歯科診療ネットワークが構築されておらず、今後課題を残した。また一般開業歯科医向け研修会は、歯科医療従事者のHIV感染症への理解を促すことがHIV診療拒否問題を解決するうえで重要な役割を果たすことが確認できた。

看護師向け研修会：

今年度は、2回とも実地開催をすることができた。各講義のアンケートから、講義内容は、理解でき満足度の高い講義内容であったことが伺えた。感想の自由記載の中に「HIV患者さんとの関わりはまだないが基礎知識を学ぶことができ、今後の看護に活かしていきたい、積極的に患者と関わりたい」との意見が多く、研修受講者のニーズに合った研修を行うことができたのではないかと考える。

講義の中には、昨年と同様にHIV陽性患者からの体験を聞き、研修受講者からの質問や感想等を自由に話す「座談会」を設けた。感想の中に「患者さんの実体験を直接聞くことで、どこか遠い存在だった患者さんを身近な存在に感じることができた」「実際の声が聞けて勉強になった。今後看護師としてHIV陽性者の方が病院にきていただくようにどのような対応が必要なのか考える機会になった」とあり、座談会を通し患者の体験や思いを聞くことは、患者の理解に役立ち、今後の患者対応について具体的にイメージが付きやすいので、今後も同様の内容を継続していきたい。

昨年度と同様に、講義に加え演習「ロールプレイ」を取り入れた。感想の中には、「実際に演じてみることでその人（患者）の気持ちが少しわかったような気がした」「実際にしてみないと具体的な関わり

方がわからなかった」とあった。ロールプレイは患者理解につながり、実際の関わりのイメージができる内容であり研修受講者の満足度が高いことが伺えた。

また、「参加する前はロールプレイや座談会があることに少し緊張していたが実際は和やかな雰囲気でした」「お茶やお菓子の準備やお好み焼きの注文と心遣いがうれしかった」との意見があり、研修受講者が過度に緊張することなく自由に発言できるよう、今後も和やかな研修環境の提供を継続していく。

来年度も講義による基礎知識の提供を行い、HIV当事者からの思いや体験を聞く機会を設け、ロールプレイなどの実際の演習で理解を深める今年度と同様の内容の研修を検討していく必要がある。

薬剤師向け研修会：

今年度より現地で2日間の研修を再開したが、現地で行うことで各施設のHIV感染症に関わる薬剤師が顔の見える関係となり、多くの情報交換を行うことができた。ディスカッションについても参集型で行うことでスムーズに意見交換でき、WEB研修会では得られない学びとなったと考える。今後も継続して現地参加型研修会を開催し、薬剤師のレベルアップの機会を創出していきたい。

心理職向け研修会：

専門カウンセラー研修会は、4年振りの現地参集かつ薬剤師と合同開催となった。事例検討など患者のプライバシーに関する議論はオンラインで行うことが難しい面もあったが、今年はクローズドなディスカッションができた。さらに、他職種（主に薬剤師）の意見も反映され、より実りのある研修を行うことができた。事後アンケートにも、「職種の垣根を越えて意見交換ができてよかった」などの感想があったこともそのことを証明している。入稿時未開催の2回目の研修会は、薬剤師向け研修会と共催でないため、「職種間の意見交換」はできないが、心理師という専門家集団が、1事例を時間をかけてディスカッションをするものになる。日常診療におけるカウンセリングやチームディスカッションでは、時間がなく気づかれなかった点も多く表出されることが期待できるため、このような形式も年1回は必要かもしれない。

全職種対象の研修会（包括カウンセリングセミナー）は、コロナ禍以前の開催形式に戻した。しかし、この間に担当者の退職や転職、あるいは多忙に伴うスケジュール調整難などの理由により、以前と

同じようなブロック・中核拠点病院の全職種が揃っての参加は困難になってきている。現在の内容は、各中核拠点病院に事例を事前に提出してもらい、それに対して当該病院のスタッフが職種別にプレゼンを行った後、各職種でのグループワークに入る。しかし、全職種が揃っていないでも困難事例を抱えている病院、あるいはこれから HIV 診療チームを構築・再構築する病院なども存在するため、そういった病院の参加者にも満足いく内容に変更していく必要がある。チームが構築され機能している病院の『自慢大会』ではなく、あくまでも事例検討を通じての適切なチーム機能の構築を目的とすべきであろう。

福祉職（MSW）向け研修会：

患者の高齢化に伴い、慢性期の診療にあたる慢性療養病床保有病院、介護施設、在宅へと、その診療の場がシフトしていく。それらを踏まえ、今後の出前研修などの働き掛けは、非拠点病院などの非専門病院ではなく、透析施設、リハビリテーション施設、障害者福祉施設などの職員を対象にしていかなければならない。これらの職員のエイズの知識は、90年代前半の有効な治療薬がない時代で止まっており、一朝一夕にこういった職員の意識と知識を変えていくことはできないが、少なくとも現在我々がケアしている患者の行き場がなくならないよう働き掛けを続けていく必要がある。

他ブロックでは県から福祉介護施設などへ「HIV 出前研修」の案内を行えば、相当の研修申込があるようだ。しかし、広島で同様に行っても、県民性なのか全く梨の礫であり、研修申込はほとんどない。もちろん魅力的な内容でないのかもしれないが、ある施設関係者から「大学のスタッフに来てもらうのは畏れ多い」といった意見も聞かれた。彼らは、往々にして HIV 陽性者の受け入れが迫ってきてから対応を考える。そのため「専門医がいない」「体制が整っていない」といった断る口実を与えてしまうことが多い。日頃から、HIV に関する情報を発信し続け、必要時にはアクセスして、出前研修を受けなくても必要な情報だけ（しかも正しい情報）を得られるようにしておくことが、解決策の一つになるかも知れない。

その他の取り組みについて：

ホームページの閲覧数は、2023年2月にはデザインを一新したにも関わらず、昨年に比べて約10%減少した。その理由は魅力的な新規コンテンツがなかった、あるいはエイズ・HIV 感染症に関する特別

なニュースがなかったことが考えられた。前述の「福祉職（MSW）向け研修会の考察」にも述べたように、ホームページの内容の充実のみならず、もっと内容の宣伝に力を入れ、日頃から閲覧してもらう努力が必要と痛感した。

教育資料として、今年度は「初めてでもできる HIV 検査の勧め方・告知の仕方」を6年振りに改訂した。近年抗 HIV 薬の注射剤や血友病の新規治療薬（Non-factor replacement therapy）などの登場があるので、次年度は「血友病まね～じめんと」をはじめとして、多くの小冊子が改訂を行う必要があると思われた。

コロナ禍により、停滞していた nPEP や「血友病薬害被害者対象検査入院」は、ほぼコロナ禍以前の状況に戻った。さらに、「なんでも相談 とも」と通じて、ブロック内の薬害被害者のニーズの拾い上げと適切な診療アドバイスを確実かつ丁寧に行っていきたい。

E. 結論

ブロック内のエイズ拠点病院に対する職種別研修は、内容や対象者を再考しながら常にアップデートしていく必要がある。また研修会開催形態も、その時々事情により柔軟に変えていくべきである。さらに、拠点病院以外の非拠点病院の医療従事者や介護施設の従事者に対しては、HIV 感染症が安定している患者あるいは血友病患者の受け入れ拒否がないよう、小冊子を作成して非専門病院・施設に配布、あるいは「出前研修」やホームページのコンテンツの見直しを行い、を必要時に必要かつ正確な情報を非専門施設のスタッフが取得し共有できるよう促していく必要がある。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表（ここまで）

1. 発表論文

- 1) 齊藤誠司、山崎由佳、野田綾香、野村直幸、木梨貴博、飯塚暁子、藤原千尋、坂田達朗、井上暢子、山崎尚也、藤井輝久、妊娠初期の HIV スクリーニング検査から HIV-2 感染症の診断に至った日本人妊婦例. 日本エイズ会誌. 25(1):21-27, 2023.
- 2) 藤井輝久、山崎尚也、井上暢子、藤井宝恵、齋藤誠司. 広島大学病院通院中の HIV 陽性者にお

けるSARS-CoV2ワクチン接種後の抗体価に与える影響. 日本エイズ会誌. 25(2):92-98, 2023.

- 3) Machiko Otani, Teiichiro Shiino, Atsuko Hachiya, Hiroyuki Gatanaga, Teruhisa Fujii, Tadashi Kikuchi et al. Association of demographics, HCV co-infection, HIV-1 subtypes and genetic clustering with late HIV diagnosis: a retrospective analysis from the Japanese Drug Resistance HIV-1 Surveillance Network. J Inter AIDS Soc 26(5):e26086, 2023.
- 4) Tomoaki Shintani, Miho Okada, Tomoyuki Iwata, Teruhisa Fujii, Mikihiro Kajiya, Hideki Shiba, et al. Relationship between CD4+ T-cell counts at baseline and initial periodontal treatment efficacy in patients undergoing treatment for HIV infection: A retrospective observational study. J Clin Periodontol 50(11):1520-1529, 2023.
- 5) Shunsuke Uno, Hiroyuki Gatanaga, Tsunefusa Hayashida, Mayumi Imahashi, Teruhisa Fujii, Shuzo Matsushita, Tadashi Kikuchi et al. Virological outcomes of various first-line ART regimens in patients harboring HIV-1 E157Q integrase polymorphism: a multicentre retrospective study. Virological outcomes of various first-line ART regimens in patients harboring HIV-1 E157Q integrase polymorphism: a multicentre retrospective study. J Antimicrob Chemother 78:2869-2863, 2023.
- 6) Azusa Nagao, Yushi Chikasawa, Naoya Yamasaki, Teruhisa Fujii, Nobuaki Suzuki, Tadashi Matsushita, et al. Haemophilia and cardiovascular disease in Japan: Low incidence rates from ADVANCE Japan baseline data. Haemophilia 29:1519-1528, 2023.
- 7) 藤井輝久, 山崎尚也, 柴秀樹. 血液曝露事故後のHIV,HBVおよびHCV感染予防対策(総説). 日歯療会誌. 44:177-86, 2023.

2. 学会発表

- 1) 藤井輝久, 山崎尚也, 中十奈苗, 藤井宝恵, 矢内綾佳, 小松真由美, 山岡愛子, 野間慎尋: ウイルス学的寛解継続中におけるCD4数増加に関する影響因子の同定. 第37回日本エイズ学会学術集会・総会. 2023年12月3日～5日. 京都

- 2) 古賀道子, 福田あかり, 石坂 彩, 田中貴大, 保坂 隆, 伊藤俊広, 江口 晋, 遠藤知之, 柿沼章子, 木内 英, 後藤智巳, 高橋俊二, 武田飛呂城, 照屋勝治, 花井十五, 藤井輝久, 藤谷順子, 三田英治, 南 留美, 茂呂 寛, 横幕能行, 渡邊大, 渡邊珠代, 四柳 宏: 非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染血友病等患者に合併する腫瘍に関する研究. 第37回日本エイズ学会学術集会・総会. 2023年12月3日～5日. 京都
- 3) 石井聡一郎, 藤井健司, 板村まりの, 天野莉沙, 大東敏和, 藤井輝久, 松尾裕彰: 広島大学病院におけるCAB+RPV注射薬導入時の薬剤師による患者意思決定支援. 第37回日本エイズ学会学術集会・総会. 2023年12月3日～5日. 京都
- 4) 岡田美穂, 新谷智章, 川越麻衣子, 岩田倫幸, 山崎尚也, 藤井輝久, 柴 秀樹: 抗HIV薬服用中の血友病患者における口腔機能と口腔環境の評価. 第37回日本エイズ学会学術集会・総会. 2023年12月3日～5日. 京都

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし